

落ち着いた感じがあると思っているのですが、いかがでしょうか。

中林(薬) 薬学生ではなく、薬剤師に対してはどんなイメージを持っていますか。

清水(看) いま4年生の授業で行っているチーム医療演習を通じて、さまざまな学部の学生と事例検討をしています。糖尿病患者の事例だったのですが、薬の話題が出たときに、糖尿病の薬を飲み続けることが大切との意見が結構出ました。私は薬学生に対して、薬のプロだからもっと積極的に発言してきてほしいと意見したら、最後に処方するのは医師だから、医師の方が上だからという発言をしていたのがすごく印象に残っています。

医師の指示ではあるものの、薬剤師からのアプローチがあってしかるべきで、医師と協働して目の前の患者さんに適した処方を決めるということ、ぜひ一緒に医療職として頑張りたいと思いました。

中林(薬) 一昔前までは、疑義照会をすると医師に怒られるといった医

師、薬剤師の上下関係がはっきりしていましたが、いまは医師も薬剤師も対等にそれぞれの専門性を生かそうという動きは強まってきていますよね。でも、実際に清水さんがおっしゃっていたような意識が根強いことは問題だと思います。その人の積極性にもよるでしょうが、薬学部の学生は皆どちらかという消極的ですね。

清水(看) この患者さんにはAという薬が最適だと考えているのに、医師は違う薬を処方すると言っている場合、自分だったらどうしますか？

中林(薬) 自分がAを出したいのに医師に遠慮して違う薬が処方され、もし医療事故が起こってしまったら薬剤師の存在意義がありません。そういう大切なことをしっかり言えるような雰囲気や医師や他の職種とのコミュニケーションで作っていきけるのが一番いいかなと思いますね。



対談を終えて

しれませんね。「副作用のリスクはどれくらいあると書いてありましたか」など、知識を持ってもらうことは悪いことではないと思いますので、「そこまでは調べていなかった」と気づいてもらうことが良いと思います。

清水(看) チーム医療の一員と言われますが、これからは一緒に治していくという、患者さんも受け身の姿勢ではなく、治療に対して主体的になってもらうことが必要なのかなと感じています。

中林(薬) それこそが服薬アドヒアランスです。いままでの受け身の姿勢が服薬コンプライアンスで、言われた指示に対して患者さんが全部守れるかということですよ。まさに、服薬アドヒアランスを良好に維持できる

かということなのだと思います。

清水(看) そうなると、看護師との連携は必須になりますよね。患者さんと接する時間の長い看護師の方が生活背景などを捉えていると思うので、その情報を共有して「この薬は飲みそうか」とか、患者さんも含めて一緒に考えて、飲み続けてもらうことが必要だと思います。

看護師は何でも幅広く仕事をこなしてしまうので、全て自分たちで解決しようと思わず、そこは薬のプロである薬剤師につなげたい。薬剤師も薬を渡したから終わりだと完結させてしまうのではなく、患者さんがその後に関わる看護師などと話し合える環境を作っていく方がいいのかなって思いました。

見方があるということを勉強できました。薬学部では患者さんとの関わりも勉強しますが、専門はそこではないのでかなり新鮮でした。

藤原(看) お互い知らないところがまだまだあったというのが一つ感じたことです。ただ、看護師が他の職種と違う部分は患者さんと接する場面だと思うのですが、そういうところはまだ伝わってなかったのかなと感じました。もっとこういう対談の機会を増やしていきたいですね。

## 患者も主体的に関わる医療へ

### 薬剤師・看護師の連携が重要に

話は変わりますが、いまはインターネット上にも薬の情報などがたくさん載っていますが、そういったものを自分で調べてくる患者さんに実務実習で実際に出会ったことはありますか？

清水(看) ありましたね。

藤原(看) いまは自分でも調べますからね。

中林(薬) 自分のことですね。

清水(看) 私は患者さんがそのように疑問を持って質問することも大事なかなと思いました。ネットで調べてくるというのは、それだけ対処法を考えているということなので、良いことではないかと思えます。

中林(薬) 自分の病気を治したいというポジティブな気持ちということですね。

小倉(薬) ただ、ネットだと、どうしても患者さんが不安になるような

重い病気や副作用の情報がトップに出てきてしまいますよね。私が実際に飲みにくい薬を処方されたときに調べたことがあります。見た目がまずそうだなと思って検索してみたら、検索予測のところ「まずい」って出てきたので、本当にまずいんだなって思っていました。

最初は飲み方が分からなくて、その薬の飲み方を調べたかったんですが、検索してみたら自分の病気とは違う適応症が出てきました。でも、ちゃんと下の方まで読むと、他の適応などが紹介されていたので、自分に処方された理由も納得できました。患者さんも一番最初に出てきた重い内容を見て、不安になってしまうのかなと思いました。

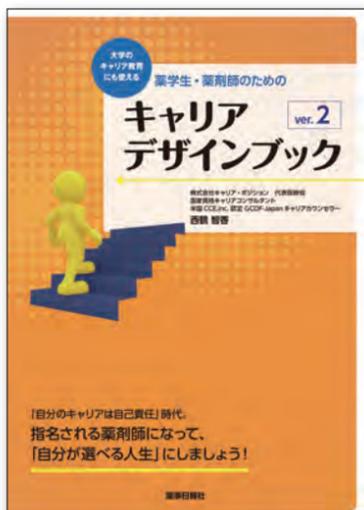
藤原(看) 患者さんにどんなことを調べたのか聞いてみるのもいいかも

### <対談を終えて>

小倉(薬) 私は看護師を目指していた時期があったので、看護師についても調べていましたが、実際に対談をしてみると、やはり学部が違うとまだ知らないことが結構たくさんあるんだなと感じました。

中林(薬) 普段接している常識とは全く違う方向からボールが飛んでくるわけですから、今回の対談では違う

『薬剤師としての将来を考えよう!』そのためのヒントが詰まっています!



B5判 122頁 定価 1,800円 + 税

## 大学のキャリア教育にも使える 薬学生・薬剤師のための キャリアデザインブック ver. 2

著 西鶴 智香 株式会社キャリア・ポジション 代表取締役  
国家資格キャリアコンサルタント  
米国 CCE, inc. 認定 GCDF-japan キャリアカウンセラー

### POINT

- ◆キャリアデザインの必要性や考え方を基本から学べる
- ◆自分自身の考えを書き込みながら整理・分析することができるワークシートを多数掲載
- ◆薬剤師の具体的なキャリア実例を紹介

大学や企業で薬剤師のキャリアデザインについて講義してきた著者が、そのノウハウを活かし薬学生が自身の将来を描くためのキャリアデザインの方法やポイントを様々なデータや図表を交えてわかりやすく解説。

### <前版購入者の声>

- ★自分の将来に関しての**考え方、価値観を変えるきっかけ**になりました。(18歳・女性)
- ★漠然としていた**自分のやりたいことを明確**にして就活に臨むことができました。(22歳・男性)

薬事日報社 書籍のご注文は、オンラインショップ (<http://yakuji-shop.jp/>) または、書籍注文FAX03-3866-8408まで。